社　会 4年C組	地域に伝わる願い ーひとり学習を進めていく力となるまなざしの共鳴ー	山崎　立也

1　単元について

(1)単元設定の理由

①学習で大切にしたいこと

どの教科においても，得意不得意があり，好き嫌いがあり，社会科も例外ではない。では，何がそうさせているのだろうか。よく，社会科は「覚えることがたいへん多くていやだ」ということを耳にする。その反対に「覚えることが少なくて良い」ということも聞く。この違いはどこから来るのだろうか。それは，社会科の学習の中で，子どもたちが知識をなぜ，どのようにして獲得していこうとするかが問題となる。子どもたちが獲得した知識が，単体として存在するのではなく，他のものと関連した存在であることが必要ではないだろうか。

社会科の目標は，社会生活についての理解を図り，社会の形成者としての基礎を養っていくことである。その目標を達成するためにいろいろな教科の内容がある。その内容は，単に社会の仕組みを知ることではなく，社会の仕組みを通して見えてくる人々の考えや思いに自分自身を近づけ，その人の願いや考え方を知り，子ども自身が持っている考えとすり合わせていくことで，より良い社会を築いていこうとし，同じ社会の一員である自覚を持っていくことである。その意味から，今回も見学を通し，実物大の対象にスポット当てることとした。見学する中で，実物に触れ，等身大のものを見ることによって，子どもに伝わる迫力は違うはずである。机上の学習だけでは生まれないものである。

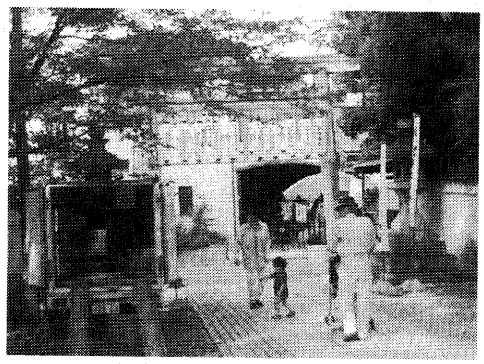
子どもたちは対象に向かって，自分との距離を縮めながら，様々な思いや考えを巡らせていく。そして，学習を進めていくことによって，割り切れない思いをなんとか解決していこうとする。その時，考えを進めていく一つの力が，仲間の考えやまなざしである。学校で学習するうえで，集団学習を抜きにして考えることはできない。しかし，その集団学習が迫力のある子ども相互が真剣にまなざしを共有し合う場として成立させたい。そのためには，個々人が自分の思いや考えを前もって作り，授業に参加することが必要条件になる。当たり前のことであるが，単に少ない時間の中で単元構成をするための「ひとり学習」の位置づけではない。

②意味と内容」のひろがり

小学校中学年の社会科の学習は，地域学習が大きなテーマである。子どもたちは3年生でも今の地域のようすを現在そこで働く人やモノを通して学習してきている。4年生では，今ある地域のようすに歴史的な要素を加味して，今，住んでいる人はもちろん，昔住んでいた人もこの地域でいろいろな願いや楽しみを持ち，よりよく暮らしていこうとしていたということを考えていきたいと考えた。

両学年は同じ地域の学習であり，今あるモノを見ていくのであるが，その見るモノによって，見えてくるものの中に昔の人々の暮らしや願いといったものが多く存在するのではないだろうか。現在の地域のようすは，今，突然に出来あがったのではなく，過去から連

続して成立してきたものであり，未来につながっていくものである。今ある地域の姿を時間的な観点を意識して考えていくことに，３年生の地域学習との違いがあり，３年生から４年生への学習の広がりであるととらえている。また，地域に昔からあるモノを調べ，それを集大成するだけでなく，昔の人たちの願いや思い，楽しみといったものでつながったり，今の地域や自分とつながりを見つけたりすることで，同じモノに対する子どもの意味合いが変わってくる。このことが，この単元の中での「意味と内容」のひろがりと考えた。



今回の学習では，刺田比古神社（以下岡の宮とする）の秋祭りを取り上げた。ここは，本校を地区として抱える古くからある神社であり，和歌山城の氏神といわれている。和歌山城は，和歌山市にとって，名高い文化財のひとつである。そのつながりで取り上げていくことができる。また宮司さんは，本校の卒業生であり，子どもとの接点もあり親しみやすく，昔の本校のようすにもくわしい。ここは本校から近い距離にあるお宮さんで，初めにクラスみんなで共通して考えていけるように，ここのお祭りを取り上げることにした。もちろんこの学習では，ここを入り口と考えているので，今ある新しい祭りであったり古くからある他の祭りであったり，目で見えるような文化財などと関わって，子どもたちが自分の学習を進めていくことと考えている。

子どもにとってお祭りというと，マスコミで取り上げられるような全国的なお祭り，自宅の近所のお祭りや縁日の出店などが思い起こしやすいと考えられるが，視覚的なものや自分だけの思いだけでなく，お祭りをとおして，関わる人の思いや願いについて考えた。

(2)単元目標

○地域には，そこに住む人の思いや願いがあることに気付かせ，自分も社会の一員であるという自覚を持たせる。
・昔のくらしに関心をもち，進んで調べようとする。
・地域の昔のくらしやようすを自分のことと結びつけて考えることができる。
・文化財に関わる人へのインタビューから，昔の人々の願いなどを調べ，まとめることができる。
・働く人の工夫や努力を具体的に理解することができる。

子どもたちが，授業の題材として取り上げた人やものに触れ，考えたことを，自分の中に取り込んで，その地域社会にあるモノに対しても，関心を持って見ていけるような子どもに育ってほしい。集団学習（一斉学習）を真剣なものにしていくためには，個人が自分の考えをしっかり作っていくことが大切であるが，それと同時に，集団に個人の考えを聞いていこうとする受容的風土や，次にどのようなことを考えていこうとするかを集団で方向付けていくような雰囲気を作っていきたいと考えた。

（３）単元計画

「地域に伝わる願い」・・・全１３時間＋α

第１次・・・昔のくらし・・・３時間

第１次は，対象と子どもが出会う場面である。子どもが持ってきた１枚の写真から見えるモノについて学習をはじめる。この写真は，この子どもの曾おばあさんの小学校時のクラス写真である。この写真から見える情報から自分の考えたことまで表現させた。

・昔の附属っ子・・・１時間
・昔の道具から・・・２時間

第２次・・・古くからあるモノ・・・８時間

自分たちの住んでいる地域に昔から残るモノを見つけ，そこから昔のようすを読み取っていきたい。子どもたちは自分自身が見つけたモノを出し合い，子どもが個々に自分の調べたいモノを調べていく。その中のひとつであるお祭りを取り上げ，学級集団で考えていくことにする。この時間に子どもたちはそのお宮さんのお祭りについていろいろな考えを出し合うことで，お祭りの意味やそのお祭りに対する人々の願いや思いを明らかにしていく。しかし，ここで話し合いの中身だけでなく，子どもたち各々が調べた方法や調べようとした視点も同時に交流することができる。これは，子どもたちが，これから自分の選んだモノを調べていく時の参考として，調べ方の幅を広げていくことになるであろうと期待した。

岡の宮のお祭りを共通項として学習し，その後，自分が見つけておいた昔について個々が調べ，調べたことを集めて地域の地図に記していきたい。そうすることで，地域の中にある昔のモノと，今ある新しいモノが共生していることが見えてくるとした。

・地域にある昔を見つけよう・・・１時間
・お祭りについて考えよう　・・・４時間
・見つけた昔を整理しよう　・・・３時間

第３次・・・地域に伝わる願い・・・２時間

第２次で取り上げた昔から残るモノの中に，昔の人の思いや願いを探りまとめていく。みんなで学習したお祭りはもちろんのこと，それぞれで調べたことも合わせて，今この地域にいる人たちとも共通する願いが見えてくるであろう。その共通する願いや思いは，この地域の未来にも子どもたちの考えがつながっていくと考えた。

２ 単元の考察

(1)子どもが「意味と内容」をひろげた場面

本時では，子どもたちが見学した岡の宮さんの秋祭りについて考えていった。見学後の子どもの感想に多かったのは，「びっくりした」ということだった。というのも，子どもたちがもともと持っているお祭りのイメージと，実際に見学したお祭りの様子があまりにも違ったからである。そこから授業が始まった。

子どもたちが持っているお祭りのイメージは，夜店がたくさん出る・大勢の人・楽しいなどである。こういったイメージは，見た目の感じ方や自分の興味のあるものに思いがいっているからであろう。しかし，岡の宮さんの秋祭りは，昼間に少人数でとても静かに行われていた。参加している人はお年寄りばかりで，神主さんが正装でお払いをしていた等

のものだった。

このことから，子どもたちは，今までの自分が持っていたお祭りのイメージをひっくり返し，新しいイメージとしてお祭りというものをとらえ直していくことになった。そして，この秋祭りは，「感謝」の気持ちを込めて，昔から続いてきている。神社に行くと，いつもお願いをするが，秋祭りは，感謝の気持ちが強い。子どもたちは，この単元を通して，秋祭りの意味だけでなく，様々なお祭りそれぞれに人々の思いが込められていること，また，地域の様子や歴史なども関わって見えてくることになった。

(2)互いのまなざしが共鳴する実際の姿とは

本時は，岡の宮さんの秋のお祭りについて考えていくことだった。というのも，子どもにとって岡の宮さんのお祭りは，子どものお祭りに対するイメージと正反対のものであり，その上，今回見学した秋祭りが，ここの神社では，一番大きな大切なお祭りであるからだった。どうして，このお祭りが一番大きなお祭りなのか。その意味を見学したときの自分が気になったところから，さらに調べていくことになった。子どもたちは，それぞれ神主さんの服装，お供え物の種類，昔の和歌山市の様子，昔の農業，お祭りの種類などを自分で調べていく。なぜ，このお祭りが，一番大きなお祭りなのかを明らかにするために。調べていくことは子どもによって違うけれども，このお祭りに見える事実の先にあるものを探り，その調べた結果から，このお祭りの重要性を見出していく。子どもたちが調べていくモノは違うけれど，何を明らかにするかという共通項（この場合，岡の宮の秋祭りが大祭である）を持ち，そのもとで子どもたちは，同意したり追求したり考えを加えたりしながら，秋祭りがどうして大きな祭りなのかという考えを作り上げていく。

まなざしを共鳴するためにも，何を明らかにするかが子どもたちに共有されていることが必要であって，それが全体のものになっているからこそ，共鳴していくことができるとあらためて感じた。

3 成果と課題

本時では，見学した神社の秋祭りが，どうしてその神社では大祭と呼ばれるのかということを中心に考えてきた。子どものお祭りに対するイメージとは違った見え方のするお祭りを取り上げた。この学習を通して，子どもたちはお祭りに対して持っているイメージをひっくり返し，新しいイメージとしてお祭りをとらえ直すことができた。

しかし，お祭り(神社の祭礼)をとらえ直すためには，子どもたちが今持っているお祭りのイメージと見学したお祭りそのものに焦点を当てた方が，よりはっきりと祭礼の意味をとらえ直すことができたのかもしれない。

この学習で子どもたちは，お祭りのイメージを膨らますことができた。自分が楽しめるということはもちろんのこと，お祭りを通して地域と自分，地域の今と昔などつながりを持ってものを見ていくことができた。また，学習形態から子ども相互の調べたこと考えたことをつなげて秋祭りを考えていくことができた。

今後とも，学習課題を子どもたちが共有している中で，一人ひとりの調べ学習を充実させながら，集団学習で子どもの調べたことから考えたことを共通な課題へ向けてつなげていきたいと考えている。